

---

# Wesker report is East world

xhanku

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

W e s k e r   r e p o r t   i s   E a s t   w o r l d

### 【Nコード】

N 1 9 3 6 B A

### 【作者名】

x h a n k u

### 【あらすじ】

クリスに殺された男ウエスカーは、死後地獄に送られるはずなのに転生をしてしまった。彼はそこで何をするのだろうか？

ノリと勢いで幻想入りさせてしまいました。ごめんなさい

駄文です。不定期更新です。主人公が悪役です。最悪の三拍子です。

## File 1 (前書き)

ノリと勢いで作ってしまいました。ゴメンナサイ

あらすじで書いたとおり、最悪の三拍子です。

ウェスカーファンや、東方ファンは、ブラウザバックをおすすめします。

「クリイイイイイイッ！！」

私は、かつては部下であり、今はライバルである彼”クリス・レットフィールド”に向かって叫んでいた。

現在私は溶岩のプールに入れられてるのに対し、奴はヘリの中だ。

正直熱い、多分溶けていると思われるが、ウロボロスの肉体のおかげで多少は保たれている。

多分、もう少しで溶けきるだろう。

そうなる前に、奴を・・・クリスとその仲間を道連れにしてやる。

私は、ウロボロスと融合した腕を、最大限に伸ばし、奴の乗っているヘリを掴んだ。

このまま楽に逃がしてたまるものか！

だが、クリス達はヘリに内装されていた”RPG-7”を構え、こちらに撃ってきた。

普通の状態の私なら、その弾頭を掴み、跳ね返すことができたろう・・・だが、両腕はヘリを掴んだままである。私は弾頭を正面から真っ当に受け止めてしまった。

その爆発と衝撃により、私はへりを離してしまった。

もうへりは腕の届く範囲にはいない。

私は肉体が溶けるのを感じながら、曇っている空に小さく消えゆくクリス達を見ながら叫び、溶けた。

これが、私が地上での最後の記憶だ。

あの最後の記憶の後・・・死んで意識が失くなってから一体何秒くらいだろうか？

気がついたら悪魔デビルのような者に囲まれていた。

きつとアンブレラのB・O・W生成でも造り出す。いや、想像すらできないほど恐ろしい者が、私を囲んでいた。

「おい、立て、貴様どうやってここに来た？ここは普通の人間ごときが来れる場所ではないッ！」

普通の人間？・・・ああ、ここに来てから自分の姿を確認していなかったが、どうやら私は人間の状態のようだ。

「それに、お前の魂がいつまで保たれるか分かったもんじゃない・・・とりあえずついて来い！閻魔様のところまで連れて行く！」

閻魔？それは日本の大魔王グレートサタンじゃなかったか？それにその大魔王グレートサタンは死んだ後の世界にしかないないと聞くが？

そういえば、私は死んでいたな・・・待てよ？ならなんで服装は変わっていないんだ？それに人間の姿のままであるし。

・・・死後には色々と考えさせられるが、答えというものは中々出てこない。

私は考えるのをやめて、律儀に待っていてくれた悪魔サタンについて行った。

ついて行った先には、観光ガイドの日本ジャパンに、横目でしか見たことのない寺院？というものが建っていた。

はて、私は最後にどのあたりで死んだのだろうか？アジアは広いから、その範囲内で死んだということも想定できるが。

「何をボサツとしてる。さっさと来い！」

死後に考えることは禁物だな。埒があかない

遠目でしか見てなかった寺院は、その時点で気づけばよかったのかもしれなかったが、かなり高い。

そういえば、この悪魔達も高いな、最低でも8mか10mはある。

タイラント以上に背が高く、そして力もタイラントの3・4倍はあ

るだろう。

なら、もしかして大魔王も高いのではないだろうか？

最低でも50mはあると聞くが。

私はまだ見ぬ閻魔とやらに、期待を膨らませ、悪魔が開いた縦約5m、横約45mの扉の先に行った。

・・・私の期待通りに、約50m近く大きかったのだが、その閻魔とやらは、机に突っ伏して寝ていた。

こんな奴に罪だの処罰がなんだのを言われるのか？全く威厳もクソも無いのだが。

「閻魔様！起きてください！なに呑気に昼寝なんてしちゃってますかッ！仕事中ですよッ？」

「うおっ！すまない、最近ここに送られる者が少ないからつい・・・」

部下に叱られる上司か・・・そういえば、クリスがよく新米達に私の愚痴を吐いていたということを知ったことがあるな。

つくづく嫌な奴だ。

「つい・・・じゃありませんよ！全く・・・送られてきた訳ではあ



りませが、ここに侵入した者を連れてきました。」

「んーっと、どれどれー・・・その黒服君か・・・じゃあちよつとこつちにある鏡の前に来て、審査をするよー」

本当にこんな奴が閻魔という者なのか？全くカリスマというものを  
感じさせないのだが。

とりあえず、指示に従い、鏡の前に行く

・・・なんなんだ?!この鏡は!私の今までのこと全てが映し出さ  
れている。

「へー、裕福な暮らしをしていたんだねー・・・その次は兵隊さん  
かー、あれ?兵隊さんから研究員になって・・・」

この鏡で、次々と自分の過去を見ていった。

研究員・・・アンブレラの研究員として色々な物を考えていった。  
勿論、兵器として使える物を

途中、「ウィリアム・バーキン」という奴と知り合ったが、奴は一  
つの街と共に消え去った。

私は表面上は特殊部隊、精鋭部隊の”S・T・A・R・S”という  
ところに所属し

裏ではアンブレラの研究員として活動していった。

S・T・A・R・Sでは、様々な難題を解決していった。

ほとんどの容疑者は、死んだように仕立て上げ、アンブレラ社に貢献するための被検体として回収し。

事件の時には、仲間達の情報を次々と調べた。

稀に、アンブレラの社員が捕まることもあったが、情報の漏洩を防ぐために陰から殺していった。

「ふう〜ん、結構酷いことしてるねー。」

私としてはなんとも思えないからどうだっていい。

そんなある日、S・T・A・R・Sに新米がやってきた。

名を”レベッカ・チェインバース”と言うらしい。

・・・この新米の写真を、私は事務機の引き出しに隠したのだが、どっかの警察官と大学生にバレてしまった。

まあ、彼女の初任務から、S・T・A・R・Sは変わったのだがな・  
・

人外と戦い、謎の仕掛けを解き、一つの街の滅び行く様を一部始終

見届け、アンブレラを潰しに行動しはじめた。

「なるほど、地獄に異様な魂が紛れ込んだ理由はこれか……一応報告しておくとして……」

閻魔が私の方を向く

「えー、あなたは、大量の生者の魂を狂わせ、そして魂を造り上げたことや、裏切り、そして

であるからにして、あなたにはある世界に飛んでもらう。」

・・・我ながら随分と悪いことをしてきたものだ。

数がありすぎて、最初の奴しか覚えていない。

「その世界では、死後も滅ぶことは出来ない・・・いわゆる、”永遠地獄”って奴だね。そこでいつちよ苦しんでちよーだいッ！」

閻魔が、何かの紙？をハンマーのようなもので叩く。

その瞬間、私の視界が真っ暗になった。

ウエスカーが去った後の寺院

そこで、ウエスカーが消えた後、閻魔は大きく息を吸い

「キヤツホウ！これで出世だあ！」

飛び跳ねたりして大いに喜んでいた。

姿の変わらない魂は、非常に稀であるが、それは極端だということ

悪なら悪に極端で、善なら善に極端

これ一人を裁くと、千人分裁いたコトになるので、十分仕事をしたとみなされる。

「ハハハ！これでこんな寂しいところともおさらばだぜ！」

そして、閻魔はウエスカーの名前や、その他色々と書かれている紙を持った。

「ありがとう！うえすカー君！君のおかげ……で……」

紙を見直した後、閻魔のテンションが下がり、頭の血が引いた。

「し、しまったあああ!!!送る世界間違えたあああ!!!し  
かも、死後も滅べない世界に送らないで、死ぬことが出来ない肉体  
を授けちゃったよ!!!これじゃ格下げ喰らうじゃん!」

普段の言動がおかしいからこうなったのかもしれない。閻魔の出世  
は遠のいた。

File 1 (後書き)

・・・クレームですね?!分かってますよ!(泣)

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
・・・え?なら投稿するな?

・・・ごめんなさいごめんなさいごめんなさいゴメンナサイごめん  
くださいお面くださいそうめんくださいおうどんくださいおうどん  
食べたい・・・

## File 2 (前書き)

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

グロテスクな描画をごめんなさい

食事中、それから虫が苦手（主に食事やG）な人は絶対ブラウウザ  
バック！

だが、駄文なのでその必要が無いかもです。ごめんなさい

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい



## File 2

意識が若干戻る。

背後に土の感覚を感じる。

上半身を起こして、意識を覚醒させ、あたりを見回す。

何も無い地平線

とりあえず立ち上がり、自分の状態を確認する。

・・・それほど姿は変わっていない。変わっているとすれば、感覚だろうか？死ぬ前より楽になっている。

他にも色々と見ていると、ホルスターがロングコートの中に入っていた。

そのホルスターの中には、ハンドキャノンこと”M500”とコンバットナイフが入っていた。

丁度いい・・・自分の身体の調子を確認するため、腕の脈の部分をコンバットナイフで切りつけてみる。

・・・死ぬ前と変わっていない、切り口は、切ったばかりなのに、何事もなかったかのような状態になった。

つまりは、物凄い速さで再生したということだ。

他にも色々調べてみるため、今度はその辺を走ってみた。

周りが地平線のため、あまり分らないが、後ろを見ると見えないところまで足跡が続いている。

これで確信した。どうやら死ぬ前と変わらない状態で”転生”とやらをしたことに

それなら・・・と、この世界を知るために、散策を始めた。

だが、どこまで行っても地平線・・・

気がついたら、飢えて倒れていた。そこから先はよく分からない

倒れてからのくくらい経ったか分からない。ただ分かることは、自分の意識が戻ったこと

目を開ける。だが、真っ暗。

一箇所光が刺している場所がある。

そこに手探りで向かい、穴を覗く

その穴の先は、知らない森

・・・なるほど、かなり時間が経ったか。

とりあえず、この暗闇から抜け出すために、穴の周りを壊す。

ずいぶんと頑丈だったようで、壊すのに手間取った。

そして、壊した穴から抜け出し、その世界を見る。

・・・一言で言えば、マイクロワールド

ありえないほど巨大な木

3mはあるだろうトンボのような生き物

そして、5m近くのゴキブリ

どうやらこの世界は紀元前よりもっと前の世界らしい。

考えに浸っていると、ゴキブリがこちらに気づいた。

すぐさまM500を構えて臨戦態勢に入る。

ゴキブリは、いきなり飛翔して、6本の図太い筋肉で、私の身体を捕まえようと襲いかかってきた。

その間に、サイトをゴキブリの頭部に合わせ、少数単位でハンマーを起こし、バレルが逸れないようグリップをしっかりと握り、機械のような正確さで、6発全ての弾丸を頭に叩き込む。

鉄の板7枚を貫通する弾を頭部に受けたゴキブリは、途中で墜落した。

しかし、貫通はしていなかった。へこんで苦しんでいるようだ。

すぐさまラッチを引き、シリンダーを開けて弾丸を装填する。

そして、図太い筋肉をガムシヤラに動かし、足掻いているゴキブリに近づき、頭部のへこんでいる部分に銃口を突きつけた瞬間にトリガーを絞った。

流石に至近距离で、ダメージを受けている部分に、マグナムという高い威力を誇る弾を撃たれたゴキブリの頭には、風穴が産まれた。

だが、流石ゴキブリ、頭部が損傷しても、未だに足掻き続ける。

それから数十分、やっとゴキブリの動きが止まった。

そして、動きが止まったと同時に、物凄い食欲に駆られる。

私に、このようなモノを食えと？

アンブレラの兵器である”ブラックタイガー”や、このようなゴキブリも素手で殺すことも可能だが、食すことはできない。

偏見？知ったものか

だが、どうしても私は人間であるから、欲には勝てず、コンバットナイフを取り出し、図太い筋肉を抜き取り、食べた。

不味い。だが、食せないわけでは無いので、その一本を全て食べきった。

食欲はこれ一本で一気に失せた。その代わり、物凄い吐き気に襲われた。

私は木の影に移動し、吐いた。

またすぐに食欲が出てくるかもしれないが、その時はその時で別のモノを探せばいい。このようなことは二度と御免だからな。

そして、先ほどの場所に戻ってみると、アリがいた。

全長30cmのアリが。

ここ最近は何だか巨大なものしか見ていないような気がするが、気にするようなものでもない。

自分も襲われるかもしれないから、私はすぐさまその場を後にした。

あれから数百万年くらいだろうか？

自分でもよくそんなことを覚えられたことに関心し、周りの変化に目を向ける。

最近では爬虫類も出てきて、食の偏見的な問題にはあまり困っていない。

ただ、元があの子供達だったということを思い出すと、また吐き気

が催してくる。

あと、最近気がついたのだが、ホルスターに着いている弾薬ポケットからは、一個弾丸を取っても弾が絶えることなく設置される。

これにより、最近の主食の肉となっている恐竜相手には困らずにいた。ダイナソー

食べられる肉は、皮膚がそれほど硬くなく、殺しやすい小型のコンプトウナグースや卵泥棒、あるいは中型のラプトルなどの肉食竜だ。

草食竜は、肉食竜への対策か、皮膚が堅くて手間取る。

だが、肉は最高だ。

・・・最近思ってきたのだが、私はもはや野蛮人とそれほど変わらなくなってしまうた。

そんな生活をしていたある日、いつもどおりに適当に歩いていると、集落のような場所にたどり着いた。

転生から今まで生きてきた中で、このようなことをする生物はまだ見かけていない。

それに、恐竜がいるとするならばまだ人間はいないはずだが・・・

疑問を浮かべながら、集落に入ろうとした。

だが

「そこで止まれ！」

門番のような奴に止められた。

「その身なり・・・貴様、何者だ！」

身なり?・・・この転生からずっと変わっていないロングコートのことか

特に何者というわけでもない・・・なら答えは一つだ

「私は人間だ。それを少し超越しただけだ。」

そう答えた瞬間、いきなり矢が飛んできた。

だが、恐竜や昆虫との戦闘で更に超越した私にとっては、その速度は風船に等しい

その矢を掴み、矢の放たれたところを見る。

そこには、銀髪の少女がいた。



とりあえず、矢を放ったのが少女であるということが分かったので、その少女の背後に回り込み、首筋にコンバットナイフを突きつける。

「なッ！どこに・・・？！貴様ッ！八意様を離せッ！」

少女の首筋にナイフを突きつけるまで、私の残像を見ていた彼は、こちらを見ると同時に手に持っていた武器をこちらに向ける。

見た感じ槍のようだが、鋭い先端は無く、穴がある。

門番が来ている物は布に等しいのに、その武器と全然釣り合っていない。

「ほう、離さなかったら、どうする？」

流石に道具を扱えるなら、このような状況では攻撃をしてこないだろう。

そう思い、門番に聞いてみた。

門番は、頭に血が昇っているものの、私が盾にしている八意様とやらを見て、苦虫を噛み潰したような顔になる。

分かっているじゃないか・・・しかし、何故この少女は怯えたり動揺などしていない？

そう思っていると、うなじから電流が流れてきた。

「ぐあッ！」

その衝撃で、少女盾を離してしまった。

少女盾は、そのまま門番の元に駆け寄った。

そこから先は、無数の針が刺さる感覚と

「八意様は、まだお若いのですからそういった無理はしないでください。」

「いえ、私はあなたがたを信じていましたので」

門番と少女の会話の一部が聞こえて、意識が無くなった。

なるほど、あの門番の顔は、命令を受けたからか……



File 3 (前書き)

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

ウェスカー悪役みたいになってごめんなさい

ほとんど東方キャラと干渉しなさそうでごめんなさい

なんか色々のごめんなさい

目が覚める。今度は知らない天井

思っただが、毎回目を覚ますと知らない場所ってのは、どういふことなんだ？

とりあえず、上半身を起こそう・・・としたら、金属の擦れる音と一緒に拒まれた。

何故？首を動かそうにも、首も固定されているためか、動けない

だが、ここがどこかの手術室のような場所だということは分かる。

「・・・やっと目が覚めたようね。」

少女の声が聞こえる。

そして、足音が近ずいて、少女の顔が視界に入る範囲に入った。

・・・改めて少女を見ると、歳は14か15あたりの顔だ。瞳は黒

綺麗な銀髪をしており、白衣を着ている。

今度は、腕を動かそうと試みる。

が、やはり同じように拒まれる

「ああ、動こうとしたって無理よ、何せ何重にも鎖を巻いたからね」

自信ありげに少女は言う

なるほど、鎖か。なら、と腕に力を込める

すると、グニヤリと歪んだような感触が伝わってきた。

「な、なんで?!まだ新しい鎖なのに!」

少女のことは無視をして、できる限り最大限の力を込める。

壊れはしなかったが、緩めることができたので、脱け出す。

そして、少女を見る。

「き、緊急事態だわ!はやく誰か来て!」

怯えた状態で後退している。

・・・中々に良い表情だ。私はそのままゆっくりと前進する。

途中で少女がコケた。少女は態勢を整えず、そのまま後退する。

私もそのまま前進する。

とうとう壁際まで来てしまった。

少女は薄ら涙を浮かべている。

・・・たまらん、このゾクゾクとくる背徳感が。

気が付けば、私は頬が緩んでいたようだ。

「お終いだよ、お嬢ちゃん」

そう言って、少女を掴もうとした

が

「八意様に触るんじゃないやねえッ！」

先ほどの門番か？

そういえば、あの門番も若かったな。19近くだったか。

その門番が、いきなり何かを飛ばしてきた。

・・・弾丸か・・・文明が進みすぎているな

それは、死ぬ前に何でも避けてきた物だ、私は易々と避ける。

「ほう、王子様の登場か。なら私は大魔王だな」

そう言った瞬間にまた一発撃ってくる。

その弾を避け、”王子様”の前に移動する。

だが、王子様も予測していたようで、発射した後にナイフを前に突き出していた。

「・・・残念だったな、姫を救出できなかったようだね」

私が移動している時に、周りを見ていないと思っただろう。

だが、私はちゃんと周りを見ている。その少年のナイフを持った腕を掴み、手刀を喰らわせる。

気絶をさせるだけだから、力加減はしている。

そして、少年が倒れた。

「私が姫だったら、このように弱い王子様は嫌だな。」



そう言って、少女に向き直る。

「おっと、危ない危ない」

二の舞は喰らわない。

振り返った瞬間を狙って射撃とは……中々やるじゃないか

もう一発撃とうとして、引き金を絞る。が

「な、なんで?!出てよ!出てよこのポンコツがッ!」

決して銃銃が悪いわけではない。ただ単純に弾が無いのだよ。

そして、また近づくと、少女もまた後退する。

「来ないで……来ないでよ……」

悪いがね、行かないわけにはいかないのだよ。

さっきの仕返しというものだからね

頬を緩め、また前進する。きっと少女には、この笑みは死神の笑みと変わらないのだろうか

・・・待て、何かおかしい。

何故この少女はいきなり銃銃を持っていたんだ？

私は、また周りを見回す。

・・・本当に時代に釣り合わない物が多いな。

主に光学迷彩とか

私は”見えないモノ”を殴る。

「ツガあ！」

壁に跡が出来る。

フム、あと3体か

一人がやられたコトで、もうすでに武器を構えている。

すかさず武器を狙い、殴り、蹴る。

武器が迷彩の範囲から外れ、視界に入る。

その後、少女の後ろへと移動し、またナイフを首筋にあてる。

「おとなしくしろ、さもないとこいつの命は無いぞ」

この手術室の中にいる奴らの、全ての動きが止まる。

「私としては、このようなところに用は無いはずなんだが・・・十分楽しませてもらったよ。」

そう言って、少女を突き飛ばす。

誰かがその少女に向かっていてる隙に、最初に犠牲になってくれた少年で開いている扉から、脱出した。

「八意様！お怪我はありませんか?!」

突き飛ばされた後、光学迷彩を着ていた一人に助け起こされた。

突き飛ばしてくれた人は、もうすでにそこにはいない。

「ええ、大丈夫よ。それより、その少年とあなたの仲間を助けてあげてちょうだい。」

「了解しました。」

その迷彩二人が動いたのを確認した後、突き飛ばしてくれた人が寝ている間に採取したその人の血液サンプルを見る。

あの超人的な身体からは一体どのような物が出てくるのだろう・・・それを考えると、ワクワクとゾクゾクが堪らない。

「私はこれからちょっと用事があるから、あとはお願いね」

「了解しました。」

神童とかいう扱いも、これなら捨てたもんじゃないわね。

あの手術室を抜け出した後、この集落を抜け出す。

後々が面倒だからな

それよりも、集落を抜け出した後、森に入った方がいいが

「ヒヤッハー！飯だア！人間ダア！」

人間の言葉を話す生き物に出会った。

姿は、無数に手があるのに対し、目は一つ、口が三つという生き物だ。

「俺の飯だ！」

「いいや、僕だね」

「あ”あ？！何言ってるんだア？俺が見つけたからオレだろうア！」

・・・やかましい

その生き物に、ダッシュで近づくと

「うお？！自分から来たぜ？！」

「命知らずにもほどがあらア！」

「でも楽に食べられるね」

向こうも、無数の手を動かしながら近づいてくる。

そして、触れ合うことの出来る範囲まで近づくと、向こうは捕まえようと、無数の手を伸ばす。

こちらは、それをさせまいと手を切断するためにナイフを振るつ。

「ギヤアア！」

「痛い！」

「ンガアッ！」

切断された時の痛さに耐えられなかったのか、向こうは手を引つ込め、退散する。

「私から逃げようなどと、許すものか」

その謎の生き物に近づき、こっちを見てきた一つしかない大きな目に、素手を貫通させた。

「Ha! You fail me! (俺をガツカリさせんじゃねぞコラ!)」

File 3 (後書き)

なんかコピーみたいでごめんなさい

テキストドキュメントからのコピーなのでごめんなさい

最後のセリフが余計でしたねごめんなさい

とにかくごめんなさい

最後のセリフは5のマーセナリーズから取ってますごめんなさい



File 4 (前書き)

ごめんなさいと言いつつもやめられない・・・

やめられない とまらない カ・・・イタタ、痛いです！

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい

あの謎の生き物を倒した後、私のもといた世界と異なることが分かったため、この世界に興味を持った。

最近思い出したが、スペンサーの言っていたウエスカー計画・・・あれを引き継ぐと言ったが、それはまだ先のことだ

今はここの世界の生き物、仮に怪物モンスターと言っておこう。

その怪物について分かったことを述べていこう

一つ、奴らのほとんどは、多くの人間の心境や想像によって生み出されるモノ

二つ、まさしく化け物、B・O・Wでも歯が立たなそうだな

三つ、知力の差がある。知力が高いのもいれば、低いのもいる。

四つ、自我がある。てっきり、想像などで生まれたから無いかと思っていた。

五つ、上下関係を持っている。知力の低いものは、高いものに従える。弱肉強食というやつだ。

これが、沢山の怪物を倒してきてわかったことだ。

だが、私には及ばない。

奴らは人間を食するようで、私に近づいてくる。これは好都合だった。

だが、ここ最近私を避けているのか、中々見つからない。そのせいで大量の恐竜が犠牲となっているのに

そういえば、あの私を捕まえた少女のいる集落はどうなっているかな・・・もう数十年は経っている、試しに覗いてみるか。

なんだ？人々が混乱しているぞ？

何があったんだ？

「やば・・・今・・・で張ら・・・いた結界・・・なくなった！」

「ま・・・の旅・・・てくれな・・・かな・・・」

この距離からでも会話は聞こえるが、途切れ途切れだ。

だが、今まで張られていた結界とやらが消えたようだな。

どおりで初めて入った時は気付かなかったわけだ。

だが、後の奴はなんだ？旅・・・？

人気の無いところから集落に近づく

「そういえば、近々妖怪の進行があるって予測されていたな」

「そうだな、できればまた誤報であって欲しいんだが」

妖怪が進行してくる？ほう、これは楽しみだ。

だが、何故落ち着いている？妖怪の進行があるのだろうか？引越したり移ったりはしないのか？

私は、こいつらが何故こんなに安心できるのかが分からない。

こいつらは何に頼っているのか・・・はたまた何を信頼してここま  
で安心しているのかがだ。

「でも、八意様が月に移動するためのロケットを作ってるってな」

・・・全くもって文明が進みすぎである。

「あと、何かの強化ワクチンだっけか？そんなのも作ってるって聞  
いたな」

何？

「ああ、俺も聞いた。何年か前に来た謎の人間？から取った血液の  
・・・さんふあるだっけ？」

「サンプルだよ、そのサンプルで超人化できるとか」

ほう、ウエスカー計画の手助けをしてくれるとは・・・あの小娘に  
も感謝しなくてはな

「でもまだ研究段階なんだろ？それにその研究を手伝った人は帰っ  
てこないし」

「仕方ないさ、ここまで生きてこられたのも八意様のおかげ、なら俺らのために犠牲になってくれたと思えばいい」

「そうだな」

そこから先は、謎の言葉の練習をしていた。

……どこのエイリアンだ？

とりあえず、もしその話が本当なら、私は神となるための第一歩を進めることができる

早速、その小娘を見つけるために、一段と目立つ屋敷を探した。

「……相変わらずだな」

私は今、相変わらず時代と釣り合わない建物の前に立っている。

集落しか見ていなかったから気づかなかったが。

あの集落の奥は、近未来的な街並みとなっている

これはこれでアンバランスだろう

そして、服装もズボンや服といった感じの格好だ。

そして、この街の中心には、ビルのような物が建っている。

そのビルの名前は「ヤゴコロコーポレーション」によるこそ、人類を超越したおじさん「ッ！」

咄嗟に銃を構えて後ろに振り向く。

だが、そこにいたのは謎の格好をした女性

中心を境に赤と青のパターンな柄をした服装をしている。

だが、私が用があるのはこいつでは……いや、こいつだ。

特徴的な銀髪は、ここに来てからこいつしか見ていない。

顔立ちも前よりは大人っぽくはなっているな

「自分を害した者に自ら赴くとは、随分と勇敢なものだ」

「あら、そうかしら」

クスツと私を見ながら笑う

・・・あの頃の出来事はトラウマになると思ったが、こいつのメンタル面は一体どうなってるんだ？

女性は、それよりも、と言って笑いを止め、真剣な表情となる。

「あなた、何か薬のような物を使っていたでしょ？」

「・・・だから何だ？」

こいつは何をした？

「今、それを研究してみたんだけど、すごいわね。もはや不老長寿に近い薬ができちゃったわ」



おかしい、あれは兵器として使えるわけで、決して医療に使えるようなものではなかったはずだ。

「それに、一回吹きかけるだけで傷が塞がるスプレーもできちゃったし」

・・・これは尚更おかしい。緊急スプレーの作成はアンブレラ社秘伝であり、作ることやそれに至るまでを考えつくことは無理に等しいからだ。

「・・・貴様、一体何者だ？」

「あら、ただの女性よ？みんなからは神童やら天才やらと言われるけど、大したものじゃないのね」

これがもし本当なら、”アレクシア・アシュフォード”を軽々と超えている。

それに、下手すれば始祖ウイルス・・・TウイルスやGウイルス、はたまたVウイルスも易々と作れるだろう

「ただ、最近になって、おかしな者が増え始めたのよ」

「・・・どんな症状だ？」

かまをかけてみる、もしこれで症状が”あれと同じ”であれば、私は行動せざるを得ない

「あら、私は症状とは言っていないのに・・・やっぱり何かわかるのね」

「いいから答えろ、知っていても貴様に教える義理は無い」

「じゃあ、私もあなたに教える義理は無い」

こいつッ！

「じゃあ、そいつらはかゆみを訴えなかったか？」

女性がほんの一瞬だけ驚く、だがバレないようにと、すぐに戻る。

「かゆみの後に高熱を起こして、死亡、そして二時間後に生命反応が消えたはずの奴が再び起き上がる」

今度は、女性は目を見開いてこちらを見る。

凶星だな、しかしまさかTウィルスが出来てしまうとは・・・

「ええ、そのとおりよ。その起き上がった者は、突然周りの人に襲いかかるうとしたの」

今もそいついると信じて、気配を探る。

いた、どこかの手術室で解剖らしきコトを行われている。

麻酔を打たれたのか、意識はあるものの、動いていない、それに頑丈な物で縛られている。

「ねえ、聞いてるの？」

「ん？」

そいつと同調しようとしている時に、邪魔が入った。

「そいつは、頭に攻撃したら動かなくなったのだけれど、これにっいても知っているのよね？」

「ああ、知っている。だが教えない」

女性が睨みつけてきた。正直怖くない

「ただ、教えられることが一つある」

「何？」

睨みを止めず聞いてくる

「それは、空気感染性は低く、血液感染性の高い病気だということだ。症状は狂犬病と似たような物だが・・・今、症状が怪しい奴を解剖している奴ら。突然奴が起き上がり、そいつらが襲われないとも限らんぞ？」

女性が睨みを止めた。代わりに、真っ青になっている。

今だ！その解剖されている奴・・・”ゾンビ”に同調する

「おい、起きろ！貴様首には何もなйдらう？そいつらはまだお前が眠ってると思うている。今なら食べられるぞ、食べ」

そのゾンビの視界が動き、一人解剖していた奴のが間近に来て、赤い飛沫が上がる。

その後強烈な痛みが頭に響くと共に、同調が切断された。

いや、これ以上痛みを感じる必要が無いため、切った。最後まで一緒になる義理は無い

「ッ！え？！どついつことなの？！ねえ！ッ！！！！」

意識が戻ってくると同時に、女性が持っていた通信端末から断末魔が響く

・・・だめだ、やはりこの感覚も死ぬ前と同じか

頭のにわかな夢の中の痛みのような物に耐えつつ、噛まれた手術医の中のTと同調する。

そこには、少数ではあるが、今増殖を開始している仲間の姿があった。

それを確認した後、同調を切断し、蒼白となっている女性に歩み寄る。

そして、こつ告げる。

「もう終わりだな、”天才”さん」

意味が分からなかった。

目の前にいる黒ずくめの彼が目を瞑って止まった瞬間に、異変は起きた。

突然鳴った私の通信端末

「八意様！大変です！今すぐこのビルを閉鎖してください！さもな

いと・・・」

そこから、通信してきた彼女の会話は途切れ、端末が落ちる音とともに、謎の呻き声と液体の落ちる音、肉食獣が生の肉を食べるような咀嚼音、それから断末魔

何が起こった・・・一体中では何が起こっているっていうの？

混乱している最中、目の前の彼が近づく

私の本能が逃げろ！と警報を鳴らす。だが、それとは裏腹に硬直して動けない。

彼がすぐ目の前に来た後、やけに天才を強調して、もう終わりだな、と言った。

・・・そうか、これも彼の仕業だったか。

私は隠し持っていた弓で彼を射ようとしたが、それも彼の手によって防がれた。

そして、また彼は突然消えた。

今はそのビルの中にいる。女性はきっと外で固まっているだろう

こいつらを生み出した血液サンプルがあるはずだ。

それを探しに来た。

「どけ」

私の肉を食べようとして近づいてきたゾンビに言う

すると、ゾンビは道を開ける。

どつちからロシア支部の時のように、言うことを聞かない奴はいない  
ようだ。



襲ってこようとする者には、これだけ言っておいて、地下に入る

やはり、私の推測は正しかったようだ。

このヤゴコロコーポレーションも、アンブレラ社と似たようなモノであり、裏ではこのようなコトを研究しているらしい。

目的の物を探す。

手術室の中には、どこにもなかった。

その他の箇所もいろいろと探していると、とあるサンプル保管室の部屋にあった。

だが、Tウイルスの他にも、見覚えのあるものがあつた。

「Gウイルス……しかもベロニカウイルスまで……！これはッ  
！」

その中の一つを手取る。

それは、ウイルス細胞が入ったガラスケースなどではなく、小さな生き物の入ったガラスケースだ。

「……どうやってこんなウロボロスウイルスを作り出したんだ？」

謎の疑問である。

私の血液サンプルからこれら全てを作り出すなんて、常識を超えて  
いるにもほどがある。

もしかしたら、と思い、他にも探してみる。

が、無かった。

流石にこれ以外のモノは作り出せなかったようだ。

だが、ウエスカー計画に必要な物は全て揃った。

あとは優秀な人材を待つのみ。

私は、取れる限りのウィルスを貰っていった。

もう用が無くなったから外に出る。

ゾンビ達はいつの間にかいなくなっていた。

そして、ビルから少し離れたところで、もの凄い轟音が響いてきた。

なにかが宙に向かって飛び立っている。ロケットだ。

その近くには他にあと2本の煙がたっているから、3本目だろう・・・  
・その発射地点に向かう。

発射地点付近には、少量の怪物がいた。

思わず頬が緩む

やっと見つけた

向こうも、こちらを見つけたようだ。

だが、こちらを見た瞬間に逃げ出した・・・何故だ？

だが、逃すわけにはいかない。コンバットナイフを装備してそいつらの退路に移動し、中枢部を抜き取る。

中枢部を抜き取ったら、食す。

抜き取られた妖怪は、力のない人形のように崩れ落ちる。

この中枢部を食すと、最初は激しい痛みに襲われるが、後々力を得ることができる。

そういえば、妖怪が進行してくるんだってな

楽しみだ。

File 4 (後書き)

キャラが崩壊しちゃってます。

ウエスカーさん大量虐殺です。

いつもグダグダでごめんなさい

なんかいつも謝ってばかりでごめんなさい

## File 5 (前書き)

何事にもポジティブだ！ネガティブ思考だけどポジティブだ！

・・・ウエスカーさんには、何回も意識を手放して貰っています。

そして、何度も戦闘に遭ってもらっています。ごめんなさい

無双させすぎとも思いました。ごめんなさい

怪物を食した後、まだ飛んでいない最後のロケットを見る。

フム、あそこに導入して調べるのもありだな・・・

”貰った”ウイルスの中からTウイルスを選び、ロケットに近づこうと歩む

だが、それは突然足を掴まれたことによって防がれた。

足元を見ると、先ほどのゾンビがいた。

「離せ、邪魔をするなッ！」

「ア”アウアア・・・」

同調して離すよう命令するも、離さない

「私はお前たちの王だ」

「ウアアアア！・・・」

「Worthless！（この役立たずめ！）」

私は足を無理やり離し、ゾンビの頭を砕く。

同調から離れる瞬間に入ってきたのは忠誠心……フツ、流石神童だな

そのゾンビから目を話すして周りを見ると、ゾンビが囲んでいた。それに紛れて妖怪も囲んでいた。

どうやら私は人気者のようだ

すぐさまホルスターからM500を抜き、適当な奴一人を撃ち抜く。そしてまたホルスターに仕舞う。

できるだけ相手に見えない速度で行なった。

「な、何だ?!」

「うおっ!は、離せ!」

ゾンビは今の出来事で混乱し、周りの妖怪も襲い始める。

それに紛れて仲間のゾンビを共食いするのも見える。

いや、あれは”そういう奴”だったな

名前は確か……”クリムゾンヘッド”だ。

特徴としては怪しく紅に光る目だ。



あと、30cm近く伸びた鋭い爪を持っており、奴らは”食べること”ではなく”襲うこと”だ。

その姿を確認した私は、再びM500を構え、一体のクリムゾンヘッドを葬る。

そして、私は葬った奴のところに移動し、その音に気づいた他のクリムゾンヘッドを葬った奴のところに誘い込む

そして、その鋭利な爪で、奴らの頭を切り、首を落とす。

他の奴らもやって来たが、そいつらはコンバットナイフで切りつけるか、素手で頭を吹き飛ばす。

そうこうしている内に、ロケットが発射し始めた。

しまった！と思った頃には時既に遅し。

ロケットは地上高くを飛翔していた。

そのロケットの窓を見る。

そこには、あの八意が勝ち誇ったような顔をしてこちらを見ていた。  
・ ・ 回収したガラスケースから断続的な機械音が聞こえてくる。

その音に気づいた私は、ウイルスなどが入った入れ物を開く

ウイルスの入ったガラスケースは、ガラスを鉄の壁が覆うようにし  
囲み、赤いランプが点滅していた。

・・・全てのガラスケースが爆弾となっていた。  
それに気づいた時には、視界が閃光に包まれた。

「八意様！もう持ちません！早くしてください！」

私は今、最後のロケットの調整を急いでいる

理由は簡単、もう永く留まることが難しいと分かったからだ。

あの黒服の彼がいる限り……

私は最後のロケットの調整を済ませる。

「もう乗っても構いません！早くしてください！」

最後のロケットは、この地に最後まで残って出発を守ってくれた人達用のものだ。

「しかし……困まっている者が一名おりますが……」

一人がその囲まれている人とやらを指差す。

チツ、またあいつか

「あいつは敵よ！人間の姿をした妖怪だから早く乗って！」

嘘では無いはず……あの黒服はもう人間を超えているから

「了解しました」

奴がこっちに気づく前に早く乗って！

心拍数が上がる。あの黒服がこちらに気づいたらもうお終いだからだ。

残っていた人数は半数に減っていた。なにやら起き上がった奴にはとんどが襲われたらしい

だが、そのおかげで速やかに行くことができた

「行くわよ！全員衝撃に備えて！」

入口を閉め、発射ボタンを押す。

すると、物凄い轟音と共に、宙へと急速に飛び立っていく

私は、窓の外を見て、小さい頃のお返しとして残した”プレゼント”を持つ彼を見る。

彼が私と目が会った瞬間、私に初めて勝てて嬉しいという感覚に襲われた。

思わずニヤけていたかもしれない。

その後、窓の外は閃光に包まれ、物凄い衝撃がロケット全体を襲った。

意識が覚醒する。

またか・・・そう思いながら目を開ける。

やはり、目を開けてみると、自分を中心にクレーターが出来ていた。相手に逃げられたことと、ウィルスが罨であり、ウエスカー計画の鍵を破壊されたことに苛立ちながらも、クレーターをよじ登る。

意外と深いな・・・ある程度登ったあと、上を向く

あと10mくらいか・・・今いる地を蹴り、クレーターの縁に足を  
落ち着かせる。

クレーターの外側は、地平線が広がっていたが、その更に遠くを見  
ると、森が広がっている。

・・・あれは逃したが、まだ怪物は残っているだろう・・・そう期  
待して、森へと走る。

森まで距離があるのか、中々たどり着かない

と、そんな時、頭上を火の玉が通る。

・・・火の玉？まさか！

火の玉が地面と接触した後、巨大な爆発が起こり、砂嵐のような  
ものが押し寄せてきた。

まずい！だが、もう間に合わない

この時、自分の不幸を呪いながら、砂嵐に飲み込まれ、意識が落ち  
た。

また意識が戻る

今度は真っ暗、どうやら地中の中みたいだ

これをどうしろと？

そんなとき、足が開放された。まさか逆さまに埋まるとはな

そして、徐々に解放されていき、ついに全身が掘り起こされた。

やっと地上に出られたか・・・

周りを見る。周りは、ただの旧人類しかない

「おい、ここから人を掘り当てたぞ！」

「ねえ、あの瞳・・・なんだか光ってない？」

「嫌だねー、橙色に光るなんて・・・もしかして妖怪?!」

どうやら話せるようだ。だが、妖怪とはなんだ？もしかして、あの怪物達のことか？

「これは大変だ。すぐに諏訪様に来てもらわないと！」

ん？誰だそれは・・・っと、またいきなり弓矢か・・・呆れたものだ

その矢を掴み、飛んできた方向に返す

悲鳴が上がった。それと共に矢の数が増えた

リハビリに丁度いいな、そのまま飛んでくる矢を返し続ける

途中、剣で突撃してきた輩もいたが、そいつらには掌打を喰らわせる。

と、矢に紛れて鉄の輪っかが飛んできた。なんだこれ？

それも掴み、返す

「なッ！」



声のした方を見る。

今度は幼女か……

金髪をしており、もみあげを赤い布で縛って、頭に二つの目が付いた奇妙な帽子を着けている。

服装は、紫のワンピースそしてその下にカッターシャツといったところか？

「貴様！一体何者だ！」

……随分と懐かしいことを聞かれたものだ。

「人間だ」

「嘘をつけ！貴様が人間なら、何故神力のあるものに易々と触れることが出来る！」

知るか、無言でホルスターからM500を取り出す。

そして、少女をサイトより少し上に乗せ、引き金を絞る。

残念、軽々とよけられてしまった

「危なッ！貴様！一体なん」二発目

「おい！最後までいw」三発目

「いい加減にしろ！こっちd」四発目

あと二発・・・また引き金を絞ろうとしたら、今度は動き始めた。だが、そんなことをしても無駄だというのに・・・弾丸を飛ばす。「ぐあッ！」それと共に少女が落ちる。

『諏訪子様ッ！』

その墜落地点に向かって、たくさんの人が回収しに行く

それでも一部は残って矢を放ってくる・・・やかましい・・・

ホルスターに銃をしまい、力を集中させる。

「ハアアア！！」

集中し終わったら迅速移動をし、一人に近づいたら、轟砲膝をかます。

まだこちらに矢を放ってくる。

高速翻身こうそくほんしんで放ってくる奴の目の前に移動し、平進掌打へいしんしょうだをする。

そして、もう一人の所に移動し、先崩掌打せんほうしょうだで奥まで飛ばす。

最後の奴には昇甲掌打しょうこうしょうだをかます。

だが、そいつは意外にもタフだったようで、まだ息をしていた。

そいつには葬送脚そうそうきゃくで頭を粉碎する。

周りを見ると誰もいない……どうやら戦える奴はもういないらしい。

つまらない……そう思い、諏訪子とやらの墜落地点に向かうことにした。

## File 5 (後書き)

ごめんなさい、名前だけじゃ分かりませんか？

先崩掌打(せんほうしょうだ/Cobra Strike) 威力：  
1200

敵の頭部を攻撃後、怯んでいる敵に近寄って発動。  
敵を掌打する。複数の敵に当たり判定あり。即死級のダメージ。

【平進掌打】(へいしんしょうだ) 威力：300  
相手の腕を攻撃後、怯んでいる敵に正面から発動。  
はたかように掌打する。

止めにならなかつた場合はダウンしない。複数の敵に当たり判定あり。

高速翻身(こうそくほんしん/Phantom Move)  
テレポートと見紛う程のスピードによる、独特な移動技。

迅速移動(じんそくいどう/Jaguar Dash) 威力：200

体力103以上で使用可能。使用毎に体力100消費。  
発動後、3回まで方向転換可能。

轟砲膝(ごうほうしつ/Jaguar Kick) 威力：1000  
迅速移動中に発動。飛び膝蹴り。

昇甲掌打(しょうこうしょうだ/Tiger Upper Cut)  
威力：400

相手の足を攻撃後、怯んでいる敵に正面から発動。

対象の敵を下から突き上げるような掌打を繰り返す。  
密着している場合は複数の敵に当たり判定あり。

そしつちゅうきやく  
葬送脚威力：600（頭部踏みつけ時は即死）

ダウンしている敵に発動。

ネリチャギのように倒れている敵を踏む。

頭の方から発動すると頭を粉碎して即死になる。

複数の敵に当たり判定あり。

以上です。バイオハザード5で確かめてみてはいいか？・・・ごめん  
なさい睨まないでこれが限界なんです（泣）

できれば感想やらご指摘をくだ・・・すみませんでしたああああ！  
！！（泣）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1936ba/>

---

Wesker report is East world

2012年1月6日17時50分発行